

①子どもたちがやりたいことを実現できる学校づくり

- ・学校が変わるのにどのようなリソースが必要か。
- ・好きを突き詰められる授業、子どもが選べる授業といった時間を創出できない。
- ・新しいカリキュラムをつくる時、既存のものをどう変えるかという発想では新しいものは生まれてこない。
- ・子ども同士の中で育つ、発見する、気付くことがあるため、そのような場・機会をつくるのが大事。
- ・学習指導要領があるが、どこまで学校の自由度があるのか。

②教員がチャレンジしたいことを実現できる学校づくり

- ・教育関係者のエンパワーメント。物理的・時間的・精神的なゆとりに係る条件整備。
- ・チャレンジしたい校長先生が学校のマネジメント、学校づくりに専念できる体制をどうつくるか。
- ・自主的に学びたい教員の思いを支えるような仕組みをどうつくるか。
- ・教員が自治体や学校を超えてネットワークとしてつながっていくポトムアップのコミュニティを仕組みでどう支えるか。
- ・チャレンジしたい学校に伴走支援し続ける専門家の育成。
- ・今持っている小さいリソースで何とかしろというのは限界がくる。

③多様性の時代に即した入試制度のあり方

- ・探究学習について、高校や大学入試、社会においてどのように評価されるか不安で、既存のシステムからはみ出してはいけないという恐れがある。
- ・学習内容の削減が入試に影響しないなど、目に見えるところが変われば、学校でアイデアを出して探究をやっていくことができる。

④様々な機関で連携・協働を推進していくための仕組み

- ・「学び＝学校教育」という認識に偏りがちだが、長野県では、もっと豊かな芳醇な学びのあり方を構想し、実現していける可能性を多く秘めているのではないか。
- ・子どもたちが持つ才能や興味関心を学校外でどのように発揮できるか、行政や学校外の団体が連携して考えて動いていくことが大切。
- ・他の学校、小中高大で相互に繋がっていくための組織や仕組みがあると連携しやすい。
- ・個別の学校の対応ではどうしても限界が出てくる。

⑤小規模校ならではの学びを実現するために必要な環境整備

- ・地域で抱える課題に対して試行的に取り組んでいくことも必要。
- ・小規模校をどうやって働きやすく、学びやすい場所にするか、意外と挑戦すれば可能性は見えてくると思う。
- ・ベテラン・中堅・新任の先生が支え合える環境づくりが必要。
- ・小規模校の良さ・多様であることを、県全体が共有できる教育資源として捉え、広域的な視野で最大限活用するという発想も必要。
- ・年齢ごとの区切りが窮屈ならば、縦につなげていけるようになるとうい。

⑥学びの場を信州全体で支えていくために必要な取組

- ・あるべき学習者像の共通認識ができていれば、辿り着き方が異なるだけで、より自由な学びができる。それぞれの学び方でも互いに認め合える環境ができたらい。
- ・学校現場だけに任せるのではなく、様々な機関と協力しながら一緒に取り組んでいくといった進め方、機運醸成が必要。
- ・どういう教育、学びをするのか、子どもたち、保護者、学校、地域等のコンセンサスが必要。

荒井座長議論のまとめ

■ 教育に関する制度や現在の取組を共に学びながら方策の検討を進める

■ 人口減少や少子高齢化の課題に直面する中山間地域をモデル的に対象として、地域の抱える課題に取り組む